

序

————— 高齢者の“頼れる主治医”を目指そう —————

わが国では、各々の患者さんがその症状に応じて専門診療科を自由に受診することが可能であり、一次医療と専門医療が明確に分かれた諸外国の医療システムとは異なります。これには、より早期に臓器・領域別の専門診療を受診できるというメリットがあります。しかし同時に、「自分の専門外の症状に関心をもたない医師」や「適切な一次対応ができない医師」を最初に受診した場合、このようなわが国の医療システムの恩恵を十分に提供できない、という危険性もはらんでいます。特に、複数の健康問題を有し、疾病が慢性に経過することが多い高齢者診療では、十分な連携が取れないままに、患者さんの判断で数多くの専門診療科の診療を受けることが、必ずしも良い結果に繋がらないこともしばしば経験するところです。特に高齢者診療では、専門診療科の受診が必要か否かを判断し、複数の健康問題を総合的にマネジメントすることができる、いわば“頼れる主治医”の存在が特に重要になってくるのです。

本書は、高齢者のよくある臨床問題に対して、それがたとえ自分の専門領域と異なる領域の問題であったとしても、適切に対応することができる“頼れる主治医”となることを目指して作成されました。“頼れる主治医”が活躍する場としては、血液迅速検査や一般画像検査が不可能で、専門医が常駐しない診療所・小病院を想定しました。構成は、高齢者の外来・病棟・訪問・施設診療において遭遇する頻度の多い臨床問題について、①患者の訴えや臨床状況、②実際に行う診療手順と専門診療科への紹介基準、③診療内容に対する専門医からのフィードバック、をそれぞれ具体的に提示し、④高齢者の“頼れる主治医”としてさまざまな臨床問題に対応するコツを、各科の専門医からアドバイスを受ける形式としてあります。

わが国の超高齢化が、今後急速に進展することは明らかです。必然的に、訪問診療を受けている患者や、施設で生活する方など、通院が困難で専門

診療へのアクセスが良好でない高齢者もこれまで以上に増加します。このような状況下では、たとえそれが自分の専門外の領域の問題であっても、適切に対応し、必要に応じ専門診療へと確実に繋ぐ「連携能力」を有する“頼れる主治医”の存在は質の高い高齢者診療のためにきわめて重要な位置を占めていくのです。

本書が、読者の先生方が高齢者の“頼れる主治医”となることに寄与し、ひいてはわが国の高齢者診療の質の向上に少しでも役立てば、编者として望外の喜びです

2015年2月

木村琢磨 松村真司

